「理念としてのアジア：岡倉天心と東洋美術史の構想、その顛末（下）」『國文學』、第45巻10号、8月号、2000年、114-119頁.

理念としてのアジア

——岡倉天心と東洋美術史の構想、そしてその顛末（承前）

稲賀繁美（いなが・しげみ）

東洋美術史構想の立役者としての天心像は、いかにしてアジア主義者としての天心像へと様変わりしたのか。そしてそこにはどのような力学が働いたのか。それを捜るために、最後に簡単に取り上げたいのが、瀧精一、伊東忠太、大村西崖、という天心の次世代に属する三人の人物である。（なお、思想史的な論点に関しては、別稿に譲る）（注1）。

5

『国華』は一八八九年に岡倉天心が創刊した美術雑誌だが、一九〇〇年に瀧精一（1873-1945）はその編集責任者となり、以降、その死の年までこの雑誌の舵取をすることになる。一九一四年に東京帝国大学に設けられた美術史講座の最初の教授に任命される瀧は、美術史学科の創設者として、さらには帝国学士院会員として、世俗的には日本の美術史研究の最高位を我がものとして生涯を終える。その瀧は一九一六年から『国華』誌上などを中心に、近年のガンダーラ美術の評価の変貌を取り上げた、一連の論文を掲載する。

とりわけ『書画骨董雑誌』大正六（1917）年十一月号「健駄羅藝術の批判に就て」は、学会内部で大きな影響力をもった論文とされる。そこで瀧はとりわけ「クマラスワミイ、ハベル」の業績に言及し、こう述べている。「かやうに欧州の学者間には、健駄羅藝術を褒る方が甚だ盛んであつた所が、近年になつて傾向が少しく変わつて来て、寧ろ健駄羅藝術は印度に於ける最上の藝術とは認める事が出来ない。其の藝術は之を審観すると、案外に価値のない者で、印度にはそれ以外の者で、それに勝つた立派な固有の藝術がありと云ふ説を為す学者が出て来た」（Taki 1917：7—8）。瀧はこの傾向を「新ナショナリスト」と名付け、近年それが、かつて支配的であったグレコ・ロマン中心の見方に取って替わる趨勢となっていることを紹介している。

ところが、注目すべきことに、瀧精一は、自分の先駆であり、『国華』の創刊者でもある天心には、ここでは一切言及し

ていない。これに先立ち一九一六年に『国華』に発表したもうひとつの論文、「印度藝術の東亜に及ぼせる影響に就て」では、瀧は天心に一言触れ、「岡倉氏の無謀なる主張には耳を傾くるの要なけれども、氏の著書が東洋主義の主張をなすものとして有力と認められたるものなる故に黙過しがたしと云へり」(Taki 1916：314) との評価を示している。この一文、既に引用したヴィンセント・スミスの文言そのままである。瀧はスミスの権威を嵩にきて、先輩たる天心の信頼性を貶める手段に利用していたことになる。

その瀧が東京帝国大学美術史講座教授に就任する一年前の一九一三年に、天心は病没していた。その直後の『国華』は、当然その創刊者の追悼記事を掲載すべきところだが、実際には雑録欄に、次のような日本美術院誹謗、といってよい文章が、無署名で掲載された。(本論冒頭でも触れた)「二十世紀初頭の仏蘭西に起つた後印象派」の「革命的思想」に言及したこの雑録は、それに続けて、日本における同類の事件として、日本美術院に言及する。「憶ふに美術院の出来た当時、この派によつて試みられた新運動は可なりの広大な波動を起したものであつたが世間からは朦朧体といふ嘲笑的名称を以て迎へられた。其の失敗の迹は明白である」云々。

いうまでもなく、日本美術院は、東京美術学校を追われた天心を慕った、横山大観、下村観山、菱田春草らが集ってなった私立の機関であり、朦朧体という新画風の提唱者も、ほかならぬ天心であった。この「日本画の革命」が、この記事では西洋画との「奇怪なる握手」と評され、それは「ついに何等の結果をも齎さなんだ」のみならず、「日本画は滅びた、同時に洋画も滅びた」と酷評される。かかる実験が「惜しい失敗」に終わったのも「当然である」との見解で、この記事は締めくくられている (*Kokka* 1913, Nr. 213：115–6)。

この中傷記事の掲載は当然、編集長、瀧精一の認可なくしては不可能である。ほかならぬ瀧自身がこの「怪文書」を執筆した疑いも濃厚となる (Satō 1998)。だが、いずれにせよこれは、『国華』がその紙面を使って、創刊者たる岡倉天心を公の場所で否認しようとする、きわめて意図的な振る舞いに出たことを、はっきり公言したもの、といって構わない。それに追い打ちをかけたのが、ガンダーラに関する瀧の署名記事であり、そこでは美術史家としての岡倉天心の信憑性そのものを、学問の名によって掘り崩す意図が、明らかに見て取れる。このころから雑誌『国華』そのものも、徐々に同時代の美術界の事件からは関心を薄めてゆき、次第に美術作品鑑定のための最も権威ある学術的研究誌としての色彩を強めてゆく。いささか生臭い話だが、日本における美術史学の確立は、いわば岡倉天心の死後の失権と軌を一にして進行していった。

次ぎに建築史へと視点を移す。伊東忠太 (1867–1954) は、日本における建築史研究の草分けといってよく、東京帝国大学の工学部建築学科の創立期のひとり、そして日本建築学会の創設者のひとりでもある。その伊東忠太は、一九〇〇年のパリ万国博覧会に際して、*L'Histoire de l'art du Japon* の執筆に参画する。E・トロンクワによるフランス語訳で出版された同書は、日本が公式に編纂した最初の『日本美術史』。総責任者は、

博覧会臨時事務局事務官長、林忠正（1853－1906）、序文は帝室博物館館長、九鬼隆一（1852－1931）の執筆であり、岡倉覚三も、東京美術学校校長辞任事件との関連で職責を離れるまでは、実質上の編集責任者だった。伊東はこの出版の建築部門の担当執筆者として、天心に協力していた（注2）。

伊東は学部卒業論文以来、法隆寺のエンタシスや建築様式に、希臘の影響を想定する一群の人々のひとりとして記憶されている。一九〇二年には中国東北部に旅行して、雲崗の石窟を調査し、ヘレニズム期のギリシア彫刻がガンダーラに影響を与え、それが東漸して北魏様式の仏像を介して（朝鮮半島経緯で）、ついには日本にまで到達している、との認識を新たにした。この経路は、当時フェノロサが唱えていた、長安経由の日本東漸説とは対立するものだった。

その伊東忠太は、天心の肝入りもあって一九〇二年にはカルカッタを訪ね、タゴール兄弟とも接触しているが、天心については、「予の見たる岡倉覚三氏」に、こんな感想が散りばめられている。「氏自らも世間も氏を以て学者とは認めなかつた様であるが、学問の頗る該博であり、識見に至ては実に高邁であつた。（中略）但材料の組織が未だ科学的に整て居らぬ様に思はれるが、勿論これは追ひ追ひ大成せられる成案が有たのであらう。（中略）要するに氏の学問は所謂学究的ではない。微に亙り、細部に入り考証三昧に憂身を窶する流では無い。只紛々たる事物を総合して大綱を組織すると云ふ造り方である」云々（Itō 1913）。

伊東忠太自身が、はたして「学究的」と認め得るか否かは、議論の分かれるところかもしれないが、先輩への礼は失しない配慮をしながらも、伊東忠太が自分と天心との差をそれとなく強調していることは否定できまい。さて天心が死去して三年のちの一九一六年、前述の仏文『日本美術史』は『稿本日本帝国美術略史』として、はじめて日本語で一般に公刊される。原則としてもともとの日本語原稿を大きく改めた様子はないが、ひとつたいへん目につく改編がなされている。すなわち、この日本語版では、伊東の責任執筆になる建築の部が、それ以外の第一部とは切り離されて、別個だてにされたことである。一九〇〇年の出版にあっては、建築も、同時代のそれ以外の美術・装飾工藝の分野の最後に、時代ごとに分けて配列されていた。時代区分を初めて日本美術史の記述に組み入れたのは天心だが、いわばフェノロサ経由の俗流ヘーゲル主義的な「時代精神」の図式、個々の時代の有機的な関連と性格づけとが、この公式『日本美術史』でも重視されていた（Kinoshita 1999［拙5］）。

ところが、伊東はそうした天心の構想にはっきりと反旗を翻し、建築史をほかの分野から独立させ、同時代的な関連の替わりに、建築独自の発達段階という、時間軸に沿った縦の流れを優先させたことになる。現在に至るまで、欧米諸外国では美術史と建築史とは隣接した学科であるのに、日本では、両者は出発点から文学部美術史学科と工学部建築学科とに分離している。その分離を、日本における準公式の美術史記述においても認知させるという、いわば建築史の分離・独立宣言が、ここで伊東によって、明確に自分の名前を刻みこむ形でなされた、と見ても言い過ぎではなかろう。

最後に東洋美術史の分野に触れておこう。ここで当然言及されねばならないのが、大村西崖（1868—1927）。かつては天心の忠実な部下であった西崖は、福地復一（1862—1909）らの画策による東京美術学校からの天心追放（一八九八）では福地陣営に就いて、美術学校に残る（Yoshida 1991；1994）。その生徒監なども歴任する西崖は、一八九九年から一九〇八年におよぶ『審美大観』全二十巻の編纂に携わったのに続いて、一九〇八年から一八年にかけては、今度はおなじ審美書院刊行の『東洋美術大観』十五巻の編纂主幹を勤め上げる。膨大な数のコロタイプ版白黒写真に、木版多色刷りによる高品質の図版を添えた、文字通り記念碑的な規模の出版は、日本における東洋美術研究の水準を誇示するとともに、また東洋美術史研究において扱うべき作品の大要を決定した限りで、今日に至る影響力を発揮している（Murakado 1998）。

また東洋学者としても、大村西崖の名声はほとんど伝説的といってよい。『支那美術彫塑編』（1915）は古典として今に名を残す。瀧精一の嫉妬ゆえか、博士号授与の対象とはならなかった、との風説を矢代幸雄は伝えるが（Yashiro 1954）、この一件にかえって発奮したものか、西崖はついで五巻からなる『密教発達志』（1918）を中文で執筆し、学士院賞を授与される。晩年の『東洋美術史』（1925）は、「東洋」といっても中国に比重が傾くが、『中国美術小史』『文人画の復興』などは中文訳も出版され、中国本土の学者からも引用されて、西崖自身、面目を施したという。その著述は体裁を変えて、戦後に至るまで、もっとも信頼できる教科書、参考書としての評価を失わず、版を重ねる。このように、こと作品情報の集積と管理に関していえば、大村西崖の生涯をかけた業績——そしてそれに代表される戦前期の学的進歩——が、先駆者、天心の仕事をまったく時代遅れのものへと押しやってしまったことは、否定しがたい（Kishiro 1933）。

6

天心に続く世代の出現とともに、東洋美術史という枠組みは学問分野として認知され、天心の業績は、いわば体よくやっかいばらいされる有り様となった。グーハ＝タクルタがインド、ベンガルの文脈で適切に指摘するように、「スワデシ運動はハヴェルやその同世代に、なにがしかの力と反響とを与えたが、それらは美術史という学問ディシプリンにおいては、もはやわずかな科学的有効性を発揮するものでしかなかった」（Guha-Thakurta 1992：183）。この指摘は、当のスワデシ運動とも係りのあった、日本の岡倉天心にもまた当てはまるだろう。

さらに、これはグーハ＝タクルタは指摘していないことだが、日本における東洋美術研究では、大村西崖から瀧精一にいたる世代が、インド美術研究におけるアナンダ・クーマラスワーミーに代表される学究たちと類比できるような役割を担った、といえるだろう。スワデシ国民運動の退潮とともに、クーマラスワーミーは理想主義的・観念論的なインド美術本質論からは徐々に離れる。天心の死後三年を経た一九一六年、ボストン美術館に設けられた東洋部インド部門の責任者に着任して以来、北米に移住したクーマラスワーミーは、その後半生を、イ

ンド美術史に関する膨大な作品目録の編纂や、詳細な研究書の執筆に捧げる。クーマラスワーミーからその著作を贈られた岡倉天心が、ロンドンでの面会を所望した書簡一通のほかは、現在までのところ、両者の交流についての資料は発見されていない模様である。だが、クーマラスワーミーのボストン美術館赴任の裏に、天心の遺志を想定することは、的外れな推測ではないだろう。大著『インドとインドネシア藝術史』(1927)をはじめとするクーマラスワーミーの著述は、インドで著作集として出版され、その幾つかは、現在なお北米の大学の美術史や宗教学講座で、必読の入門書として指定されている、という。

翻って、岡倉天心の場合はどうだろうか。日本美術院は近年、設立百周年を祝い、膨大な『日本美術院百年史』を発刊した。だがその一方で、美術史研究の専門家の世界では、天心の名前に言及のなされることは、はなはだ稀だといってよい。田中日佐夫氏は、学問分野としての美術史学を批判的に評定した発表(Tanaka 1992)で、日本の美術史学が、天心の志のうち、ふたつの点をないがしろにしてきた、と指摘している。

ひとつは、美術史学が文化財指定の科学的鑑定や、財産目録編纂に自己目的を設定した結果、作品研究が個別的となり、作品創造や作品受容の社会的環境、歴史的環境への考慮が疎かにされてきたこと。ふたつめに、科学的な調査機材の活用が、研究助成金獲得上の有利さなどもあって奨励されたためか、エックス線分析、紫外線・赤外線写真撮影、さらには三次元立体解析のデジタル情報のコンピュータ処理などといった技術偏重が急速に進み、その陰で、藝術受容、藝術鑑賞の心理的側面、すなわち作品に(超)歴史的な生命を与える条件への配慮といった面が軽視されたこと。

この第二の点に関しては、田中氏は、日本における心理学の学祖でもある松本亦太郎の方法論を喚起しているが、思えばこの側面こそ、天心が『茶の本』を通じて英文で詳細に説明を試みた、東洋藝術の賞翫の本質ではなかったか。果たして博物館や美術館の無機質の陳列ケースのガラスの向こう側に、作品を手に触れ得ぬ存在として隔離することが、作品鑑賞の王道なのか。天心の晩年以降、この疑問に答えたのは、鈍翁こと益田孝(1848–1938)はじめ、幾多の個人コレクションを形成した、近代日本の茶人たちだった(注3)。だが、今日の日本の大学の、美学教室はいざ知らず、美術史教室で、『茶の本』が作品分析・鑑賞の教科書に指定されている、といった話は、寡聞にして聞かない(実例があれば、是非ともご報告を拝聴したい)。

7

本稿を閉じるにあたって、アンリ・フォシオン(1881–1943)から、ひとつ、あまり知られていない一節を引用をしておきたい。『形の生命』(1934)ほかで有名なフォシオンは、両大戦間に、パリ・ソルボンヌ大学の美術史講座を主催し、世界的権威の名を欲しいままにした美術史家だ。そのかれが、一九二五年に自著『北齋』(初版 1914)の第二版に添えた、序文の一節である。『北齋』は、十九世紀末のフランスの日本趣味に遅ればせながら便乗して、北齋をもって、日本美術はおろか、東洋美術の最高位に位置付けようとした書物だった。二〇年代

中頃の今にしてみれば、いささかならず軽率との謗りを免れぬこのかつての自分の判断。それを、日本や（ザイドリッツら）欧米の学者たちからの反論に対抗して、あえて正当化せねばならない。そんな立場に、あるいはフォシオンは立たされていたのかもしれない。その限りでは極めて政治的といってもよい下心が、このフォシオンの序文の裏には匂ってもくる（注4）。

「アジア中の哲学者たち、詩人たち、藝術家たちの作品から、日本人オカクラは、おそらくは架空のものだが、構造として天才的な、ひとつの連続性（une continuité, peut-être fictive, mais génial comme structure）を抉りだした。それは共通の遺産、有機的な思考の連続性というべく、自らの美徳をしっかりと保持し、常に緊張した［アジア］人種によって鼓舞された、あのひとつの大陸の愛国心というべきものだ」（Focillon 1925：iii）。

「おそらくは架空のものだが、構造として天才的」な、とフォシオンが評する「アジアはひとつ」という理念、あるいは理想。そこには、天心・岡倉覚三の思索者、見者（voyant）としての射程のほどとともに、そのかれが、没後、東洋美術史研究という、かれ自身がその礎を築いたはずの領域から、なかば意図的に排斥されてしまった理由が、見事に言い当てられている。ひとつの制度が制度として自律するためには、その創出の責任者を抹消する必要がある。その不可欠の「見えざる媒介者」（Žižek 1991：185. Bourdieu 1998：118）こそ、歴史が天心に与えた役割ではなかったか。

「ひとつのアジア」という、いわば「架空」の合言葉によって、天心は強引にも、東洋美術史研究という領分を〝捏造〟し、その発端をこじあけた。だが「東洋美術」なる空虚にして虚構の観念によって、そこには（実際にその研究に従事する専門家集団や博物館の「東洋部」なる分類範疇として）、もはや抹消できず、取り返しもつかぬ実体が生み出されてしまった（注5）。そうした罪深い「創出」の罪をなすり付けるに最適な存在こそが、天心だった。あたかもその創出者の影が、この先幽霊のように舞い戻りはしないか、と恐れるがごとく、日本における東洋美術史研究は、大村西崖から瀧精一の時代に、天心という名前を、いわば象徴的な次元で抹殺した。かれは、そのいかにも「架空」でしかない、「東洋美術史」創出という〈物語り〉の痕跡を抹消するために、選ばれた犠牲として、自ら消し去られる運命にあった。天心は学者にあらず、との判定は、日本の「東洋美術史学」による「父殺し」の儀式だった。

その一方で、天心の英文著作が三巻の「全集」として聖文閣より版行されるのは、ようやく昭和十一十一（1935−6）年のこと。つまり現実的には、『東洋の理想』をはじめとする天心の英文著作が、二十世紀初頭の同時代の日本人読者に大きな影響を与えることはなかった、というのが実態だろう。そしてその最初の日本での全集が刊行されたとき、時代はすでに二・二六事件（1936）を招く軍国主義の世の中となっていた。天心生前未刊の原稿「我らはひとつ」が、『東洋の覚醒』として翻訳出版されるのは一九三八年。その二年後には「皇紀二千六百年」が華々しく祝賀される。こうしてアジア主義者としての天心像が形成されてゆくことになる。

＊本稿は、一九九九年三月ボストンで開催された、全米アジア研究協会（AAS）年次総会、「岡倉天心の再検討」部会で発表した英語論文、およびそのフランス語訳から、改めて日本語に訳出したものである。表現がいささかこちたく、翻訳調を免れていないことをお詫びする。

注1　天心の思想面の再検討としては、Shigemi Inaga "Okakura Kakuzō's Nostalgic Journey to the Motherhood in India."『東洋の覚醒』として一九三八年に出版された原稿を、一九〇二年のカルカッタにおける当時の執筆状況との関連で分析した。なおこの論文は、一九九八年一二月にカリフォルニア大学ロス・アンジェルス校で開催された、「岡倉天心ワークショップ」での発表原稿である。お招きいただいたFred Notehelfer教授に謝意を表す。またその日本語訳は、平川祐弘（編）『異国への憧憬と祖国への回帰』、明治書院にて近刊の予定。

注2　一九〇〇年パリ万国博覧会での『日本美術史』に関しては、(Inaga 1997)。また同書に関しては、小路田泰直『日本史の思想』(Kojita 1997)、馬渕明子（TNRICP 1999）などの論文がある。小路田泰直論文には、編集責任が岡倉天心から福地復一に移ったところで、天心の汎アジア主義的歴史観が、水戸学風の国粋主義的史観へと変更された、との魅力的な仮説がある。しかしながら、これはさらに十年後の検定歴史教科書における南北朝正閏論争を逆投影している部分があり、同書のヴィヴェカーナンダと天心の思想の比較ともども、仮説としておもしろいが、立証にはなお手続きのうえで飛躍が多い。また馬渕論文に対する著者の異論と見解は、「『今、日本の美術史学をふりかえる』を聴いて」『あいだExtra』25号（美術と美術館のあいだを考える会、1998）、「官製『日本帝国美術史』の誕生」『図書新聞』一九九八年三月十四日付、ほか。

注3　近代日本における産業資本と連動した茶人の藝術収集に関しては、(Inaga 2000)。益田孝を中心として近代日本茶人の美術収集を論じた英文の著述としては、Christine Guth, *Art, Tea, and Industry : Masuda Takashi and the Mitsui Circle*, Princeton Univeristy Press, 1993.

注4　フォシオンに至るフランスでの北齋評価の変貌に関しては、Shigemi Inaga, "The Making of Hokusai's Reputation in France", *The Third International Hokusai Conference*, Obuse, Nagano, 1998. その邦訳は『Art Forum 21』（京都：醍醐書房、第二号、近刊）。

注5　ボストン美術館東洋部の確立と岡倉天心とのかかわりについては、展覧会図録『岡倉天心とボストン美術館』名古屋ボストン美術館　一九九九。とりわけAnne Nishimura Morse, "Promoting Authenticity:Okakura Kakuzō and the Japanese Collection of the Museum of Fine-Arts, Boston", pp. 138—160.

references:

Atmaprana 1995 : Pravrajika Atmaprana, *Western Women in the Footsteps of Swami Vivekananda*, New Delhi : Ramakrishna Sarada Mission.

Benerji 1999 : Debashish Benerji, "Homologies of Cultural Resistance in Turn-of-the-Century Japan and India : A Comparative Study of Okakura Kakuzo and Abanindranath Tagore", UCLA Workshop on Okakura Tenshin, Jan. 22, 1999.

Bourdieu 1998 : Pierre Bourdieu, *Les Règles de l'art,* Paris: Éditions de Seuil.

Chandra 1966 : Pramod Chandra "Preface" to E. B. Havell, *The Art Heritage of India,* Bombay : D.B. Taraporevala Sons & Co. private Ltd.

Commission impériale du Japon 1900 : *L'Histoire de l'Art du Japon.*

Coomaraswamy 1908 : Ananda K. Coomaraswamy, "The Aims of Indian Art", in *Fundamentals of Indian Art,* [s.d.] vol.1, Jaipur : The Historical Research Documentation Programme, pp. 1−19.

——— 1927 : Ananda K. Coomaraswamy, *History of Indian and Indonesian Art,* New York : E. Weyhe.

Gotô [s.d.] : 後藤末吉「天心とインド美術」茨城大学五浦研究所 pp. 84−101.

Guha-Takurta 1992 : Tapati Guha-Thakurta, *The Making of A New Indian Art,* Cambridge : Cambridge University Press.

Focillon 1925 : Henri Focillon, "Préface", 2nd édition, *Hokousaï,* Paris : Librairie Félix Alcan.

Foxe 1975 : Barbara Foxe, *Long Journey Homé, A Biography of Margaret Noble,* London : Rider and Company.

Havell 1908-a : Ernest Binfield Havell [1913], *Indian Architecture,* London : J. Murray.

——— 1908-b : Ernest Binfield Havell [1928], *Indian Sculpture and Painting.* London : J. Murray.

——— 1911 : Ernest Binfield Havell [1920], *Ideals in Indian Art, London* : J. Murray.

——— 1966 : E.B. Havell, *The Art Heritage of India,* Bombey : D. B. Taraporevala Son & Co. Private Ltd.

Horioka 1975 : Yasuko Horioka, "Okakura and Swami Vivekananda" *Prabuddha Bharata,* Mayavati : Advaita Asrama, Jan. pp. 30−34 ; Mar. pp. 140−45.

Horioka 1982 : 堀岡弥寿子『岡倉天心考』吉川弘文館

Inaga 1995 : Shigemi Inaga, "De l'artisan à l'artiste au seuil de la modernité japonaise, ou l'implantation de la notion des Beaux-Arts au Japon", *Sociologie de l'art,* No 8, pp. 47−61.

——— 1996 : 稲賀繁美「岡倉天心′柳宗悦′魯迅—東洋美術史構想を巡って」*Comparative Literature, Proceedings from the 1st Conference on East Asain Compara-*

tive Literature [1998], Seoul, pp. 125－145.

——— 1997 : Shigemi Inaga, "The Cognition Gap in the Recognition of Masters and Masterpieces in Modern Japanese Historiography (1880－1900)", *Masters and Masterpieces in Japan and in the West,* International Symposium, University of East Anglia, Sep. 1－3, 1998 [to be published].

——— 1998 : Shigemi Inaga, "Okakura Tenshin's Disciples and their Contemporaries in India", Workshop, *Rethinking Okakura Tenshin* UCLA, Dec., 22, 1998.

——— 1999 : Shigemi Inaga, L'Impact d'Okakura Kakuzō, dit Tenshin, sur la tradition de la discipline de l'histoire de l'art en Inde et au Japon au dêbut du XX"siècle" (à paraître).

——— 2000 : Shigemi Inaga, "The Formation of Public Museums and Private Collections in Modern Japan", International Symposium, *Interpreting Asia in Museums,* The British Museum/Museum of Mankind, London.

Inoue 1994 : 井上章一『法隆寺への精神史』東京：弘文堂

Itô 1913 : 伊東忠太「予の見たる岡倉覚三氏」『研精美術』vol. 79（十月十五日）

Jayaraman 1991 : Lalitha Jayaraman, "Sister Nivedita's Vision of India", in Sivaramkrishna Sumita Roy (éd.), *Perspectives on Ramakrishna-Vivekananda Vedanta Tradition,* Hyderabad : Ramakrishna-Vivekananda Seva Samiti.

Karatani 1999 : 柄谷行人「美術館としての歴史」′ シラネ・ハルオ・鈴木登美（編）『創造された古典』東京：新曜社 pp. 302－365.

Kinoshita 1999 : 木下長宏「岡倉天心論の形成とその批判」『日本における美学・芸術学の歩みと課題』美学会′ 平成十一年十一月 pp. 27－35.

Kishiro 1933 : 木代修一「美術史」′ 歴史教育研究會編『明治以降に於ける歴史學の發達』四海書房 pp. 247－323.

Kitazawa 1999 : 北沢憲昭「美術における日本′ 日本における美術」′ 北沢（他編）『美術のゆくえ′ 美術の現在』東京：平凡社

Kojita 1997 : 小路田泰直『日本史の思想』東京：柏書房

Kokka 1913 :「雑録」′『国華』pp. 115－116.

Mitter 1994 : Partha Mitter, *Art and Nationalism in Colonial India 1850-1922,* Cambridge : Cambridge University Press.

Morimoto 1989 : 森本辰雄「天心とインド」『文学』pp. 84－96.

Mukherjee 1997 : Jayasree Mukherjee, *The Ramakrishna-Vivekananda Movement : Impact on Indian Society and Politics (1893-1922),* Calcutta : Firma KLM Private Ltd.

Murakado 1998 : 村角紀子「審美書院の美術全集にみる日本

美術史の形成」明治美術学会口頭発表 七月十一日′および『近代画説』八号（一九九九）pp. 33－51.

Nakamura 1996：中村忠男「ヒンドゥー・ベザール・プリントの形成と《母》なるインド」『立命館言語文化研究』pp. 67－86.

Nivedita 1903：Nivedita of Vivekananda-Ramakrishna, "Preface" to Okakura Kakuzô, *The Ideals of the East* [see Okakura 1903].

——— 1967：*The Complete Works of Sister Nivedita,* vol. 1, vol. 2, vol. 3, vol. 4, Calcutta：Ananda Publishers Private Ltd.

——— 1968：*Nivedita Commemoration Volume,* ed. Amiya Kumar Mazumdar, Calcutta：Vivekananda Janmotsava Samiti.

——— 1975：*Sister Nivedita's Lectures and Writings,* Calcutta：Sister Nivedita Girl's School.

——— 1982：*Letters of Sister Nivedita,* vol. 1, vol. 2, [vol. 3], Calcutta：Nababharat Publishers.

Notehelfer 1990：Fred G. Notehelfer, "On Idealism and Realism in the Thought of Okakura Tenshin", *Journal of Japanese Studies,* vol. 16, Nr. 2, pp. 309－354.

Okakura [1902] 1938／1940 聖文閣：Okakura Kakuzô, *The Awakening of the East.*

——— 1903：Okakura Kakuzô, *The Ideals of the East,* London：John Murray.

——— 1905：Okakura Kakuzō, *The Awakening of Japan,* New York：Century.

——— 1906：Okakura Kakuzô, *The Book of Tea,* New York：Fox Duffiled & Cie；1964：New York：Dover.

——— 1911-a：Okakura Kakuzô, "Religion in East Asiatic Art"→ Okakura 1980；1984

——— 1911-b：Okakura Kakuzô, "The Nature and Value of Eastern Connoisseurship"→ Okakura 1980；1984

——— 1917：Okakura Kakuzo, *Les Idéaux de l'Orient/ Le Réveil du Japon,* Paris：Payot.

——— 1922：Okakura Kakuzo, *Le Livre du thé,* Paris：A. Delpeuch.

——— 1980：岡倉天心′『岡倉天心全集』′ 8 vols. 東京：平凡社

——— 1984：Okakura Kakuzô, *Collected English Writings,* 3 vols. Tokyo：Heibonsha.

Okakura 1987：岡倉古志郎「天心とベンガルの革命家たち」『東洋研究』pp. 1－45.

——— 1999：岡倉古志郎′『祖父 岡倉天心』東京：中央公論美術出版

Ôkubo 1987：大久保喬樹『岡倉天心』東京：小沢書店

Ômura 1899－1908：大村西崖（ほか編）『審美大観』京都／東京：審美書院

——— 1909－1918：大村西崖（編）『東洋美術大観』東京：審美書院

——— 1910：大村西崖『東洋美術小史』私家版
——— 1915：大村西崖『支那美術彫塑編』私家版
——— 1918：大村西崖『密教発達志』私家版 in 5 vols.
——— 1925：大村西崖『東洋美術史』私家版
Ôoka Makoto 1975：大岡信『岡倉天心』東京：朝日新聞社
Prabuddhaprana 1990：Pravrajika Prabuddhaprana, *Tatine, The Life of Josephine MacLeod,* Calcutta：Sri Sarada Math.
Roy 1995：Parama Roy, "As the Master Saw Her", in Sue-Ellen Case, *et. al.* (ed.), *Crusing the Performative,* Bloomington and Indianapolis：Indiana Univerisity Press, pp. 112－129.
Satô 1998：佐藤道信『明治国家と近代美術』東京：吉川弘文館
Smith, Vincent 1911：Vincent Smith, *A History of Fine Art in India and Ceylon,* Oxford：Clarendon Press.
Takagi 1997：高木博志『近代天皇制の文化史的研究』京都：校倉書房
Taki 1916：瀧精一「印度藝術の東亜に及ぼせる影響に就て」『国華』四月号 pp. 313－323, 五月号 pp. 347－363.
——— 1917：瀧精一「健駄羅藝術の批判に就て」『書画骨董雑誌』Nr. 103, pp. 1－6.
Tanaka 1992：田中日佐夫「日本美術史学の形成と現状批判」『美学』p. 63.
TNRICP 1999：東京国立文化財研究所（編）『今、日本の美術史学をふりかえる』（非売品：英文論文を含む）；『語る現在、語られる過去－日本美術史学百年』（市販：英文論文を欠く）東京：平凡社；*The Present, and the Discipline of Art History in Japan：International Symposium on the Preservation of Cultural Property,* Tokyo：Heibonsha
Tôkyô Teishitsu Hakubutsukan 1916：東京帝室博物館（編）『稿本 日本帝国美術略記』東京：隆文館出版会社
Yashiro 1954：矢代幸雄「忘れ得ぬ人々 その一 大村西崖」『大和文華』（六月一日）pp. 64－76.
Yoshida 1991：吉田千鶴子「大村西崖の美術批評」『東京芸術大学美術学部紀要』pp. 25－52.
——— 1994：吉田千鶴子「大村西崖と中国美術」『東京芸術大学美術学部紀要』Nr. 29, pp. 1－35.
Žižek 1991：Slavoj Žižek, *For They know not what they do：Enjoyment as a politaical factor,* London／New-York：Verso.

長田俊樹氏、田中日佐夫先生、山口静一先生から文献の教示を受けた。記して謝意を表す。

——国際日本文化研究センター助教授・美術史——

前回訂正

十三頁下段五行目 インド着任早々→マドラスをあとにして、カルカッタ着任早々

十四頁上段十二行目 「ポスト印象派展」→「マネとポスト印象派展」

日本語・日本文学・日本文化

國文學

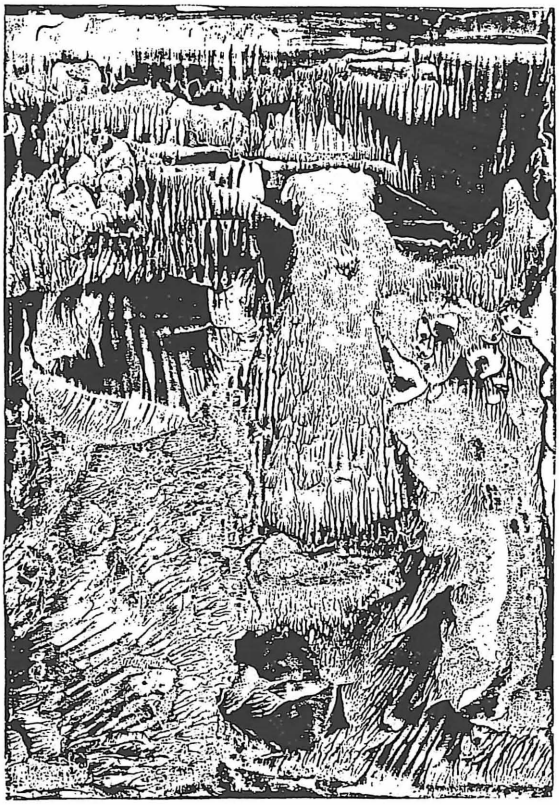
解釈と教材の研究

〔年9月25日　第3種郵便物認可　平成12年8月10日発行（毎月1回10日発行）第45巻第10号8月号

古代語

——時間のことば、空間のことば

■**時間（とき）のことば**　ぬばたまの夜、あるいは「始源の闇」／古今集と暦　春はどこから来たのか？　■**古代空間とことば**　文字出土資料とことば　—奈尓波ツ尓作久矢己乃波奈／古代日本の風水簡介／こころの遠景　■**古代語の圏域**　多言語文化のなかで／太陽の子＝王の古代語—「てだこ」と「てだぬふあ」と



■アフリカの言語とその一特徴—名詞クラス　■**和漢梵の問題**　漢文という文体の移入　幻像の悉曇—梵・漢・和三国言語観をめぐって　■**古代語追跡**　託宣のことば—神の名告　消息のことば—物語文学の中の手紙／日記のことば—「身の上」「書く」「日記」

2000年 8月号 第45巻10号

學燈社